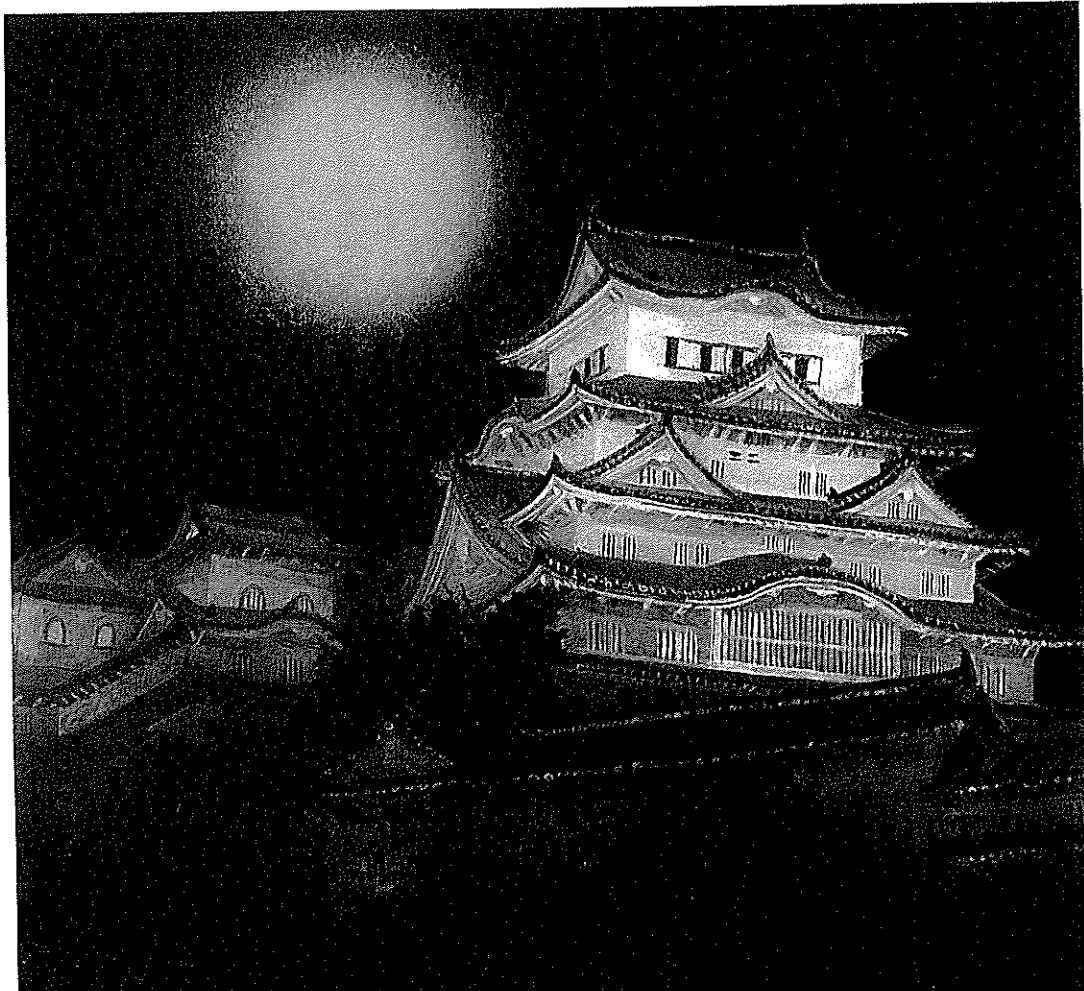


文藝春秋

戦後70年記念特大号 **完全保存版**
高倉健 病床で綴った最期の手記 新年号

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
平成二十七年一月一日発行毎月一回一日発行
第九十三巻第一号十二月十日発行



文藝春秋 BOOK倶楽部 特別篇
BUNSHUN BOOK CLUB SPECIAL

戦後の名著 「わたしのベスト3」

片山杜秀
鹿島 茂
梯 久美子
中村彰彦
野口悠紀雄
佐藤 優
佐久間文子
保阪正康
本郷和人
出口治明
山内昌之

(掲載順)



私を癒して くれる本

出口治明

ライオン生命保険会長のCEO
『ハドリアヌス帝の回想』
マルグリット・ユルスナール 白水社



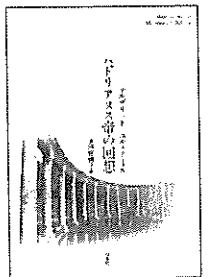
『近代世界システム』
『ウォーラーズティン』名古屋大学出版会(全4巻)

『想像の共同体』
ベネディクト・アンダーソン 書籍工房早山

無人島に一冊だけ本を持っていくことが許されるとしたら、僕は、迷うことなくマルグリット・ユルスナール『ハドリアヌス帝の回想』を選ぶだろう。初めて読んだのは学生時代だから、かれこれ五十年近く前になる。最初は小説だとは思わなかった。ハドリアヌスの回想録がどこかで発見されたのだと思った。それほど追真的に感じたものである。どのページを開いても、端正で無駄のない文体で人生の機微が的確に描かれ

ている。大袈裟に言えば、この五十年間、終ぞこれを超える書物には出会わなかった。今でも、心が少し疲れたりした時には、ふと、ページを開いて癒してもらっている。

次点以下は難しい。素晴らしい書物がたくさんあるからだ。そこで、僕の好きな歴史の分野で選んでみた。どちらも三十代に出会った本だ。一つは岩波から出たイマニユエル・ウォーラーズティン『近代世界システムI、II』。世界を長波・中波・短波で捉えるブローデルの「地中海」にも感心したが、世界を巨視的に中央・半周辺・周辺とシステマ的、一体的に捉えるウォーラーズティンの物の見方は、歴史学に画期をもたらしたと考える。おそらく、この世界システム論の影響を受けていない歴史学者は、あまりいないのではないか、と思われる。ひょっとしたら僕の大好きな歴史小説の傑作、若桑み



どりの『クアトロ・ラガッツィ』も世界システム論から着想を得ているのではないだろうか？

もう一つはベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』だ。近代は、ナポレオンが実質的に創出したネーションステイト(国民国家)に端を発するが、ネーションステイトを成立せしめたものは、メディアを駆使した想像の共同体、つまりナショナルイズムの創出にあった。アンダーソンを読まずして、近代のナショナルイズムやネーションステイトを理解することは出来ないだろう。この二書は、歴史学において、近代経済学におけるルーカス批判の役割を果たした名著だと考える。

歴史学者としての 原点

山内昌之



『死霊』
塩谷雄高 講談社文芸文庫(全3巻)

『蠣崎波響の生涯』
中村真一郎 新潮社 絶版

『反古典の政治経済学』
村上泰亮 中央公論社(上下) 絶版

人生の方向を模索していた学生時代に邂逅した書物。塩谷雄高がドストエフスキーに影響を受けたように、私は『死霊』に登場する人物たちの議論から刺激を受けた。共産主義思想を奉じる地下活動家の論争こそ、『死霊』の中心軸に他ならない。『宇宙』や『無限大』に始まり、「存在」と「虚體」とは何か、「自同律の不快」といった青年期に悩む人生の命題に正面から挑んだ作品の迫力を忘れられない。歴史学の道に進んだ私

が『スルタンガリエフの夢』や『東国際関係史研究』でムスリム共産主義者スルタンガリエフやトルコ人軍人政治家カラベキルの内面分析に取り組んだのも、どこかで『死霊』の影響があったからかもしれない。『蠣崎波響の生涯』は、松前藩家老というよりも、漢詩人にして画家として著名な蠣崎廣年の詩作や画業をまとめたばかりでない。江戸時代末期の北辺で対露関係の最先端に立つ松前藩の複雑な事情、家中の仕置きとしてまとめめる技は、歴史学の視角から見ても間然するところがない。陸奥国梁川に転封された藩の蝦夷地本領復帰には工作資金が必要だった。その捻出のために画業に励む波響を見ると、芸術の才に恵まれた政治家の悲劇をつい思ってしまう。いまフランスにある夷酋列像図の数々や、日本に残された釈迦涅槃図と唐

美人図など芸域の広い波響の絵をカラーで見ること、私はどれほど心が癒されたことだろうか。

『反古典の政治経済学』は、政府の産業保護政策を独特な開発主義論から分析した作品だが、経済学のみならず社会科学全般にわたる知の総合でもある。助教授当分の私の仕事を利用してくれたのには驚いた。氏の『新中間大衆の時代』とともに、歴史学者は何をなすべきかと私に自問させた作品である。氏の学問のいずれかに連なると自負をしていた私にとって、氏の東大駒場辞職と早すぎた死は、まことに惜しまれてならない。自分の研究成果を本当に評価してもらいたい学者の一人であった。

